Ethnobotany of the Penan Benalui of East Kalimantan, Indonesia

平成 13 年度編入
派遣先国：インドネシア共和国
派遣先機関：CIFOR（国際林業研究センター）
小泉 都

キーワード：プナン，狩猟採集民，民族植物学，社会経済，東カリマンタン

派遣先機関の概要

CIFOR（Center for International Forestry Research: 国際林業研究センター）は 1993 年にインドネシア・ボゴールに設立され，森林での活動や林業を通して発展途上国の人々の生活を支えていくための研究活動を行っている。東南アジア，東アジア，南米，中央アフリカ，西アフリカなどで数多くの研究を行い，その結果を地域社会に還元して，地域の人々の生活の改善などに取り組んできた（写真１）。CIFOR は国連の CGIAR（Consultative Group on International Agricultural Research: 国際農業研究協議グループ）の傘下にある国際研究機関のひとつである。CGIAR は，日本を含め 47 の国々，4 つの民間基金，国連諸機関を含む 13 の国際機関からの支援をうけて活動を行っている。つまり，CIFOR の研究成果を日本の人々も支えているということである。

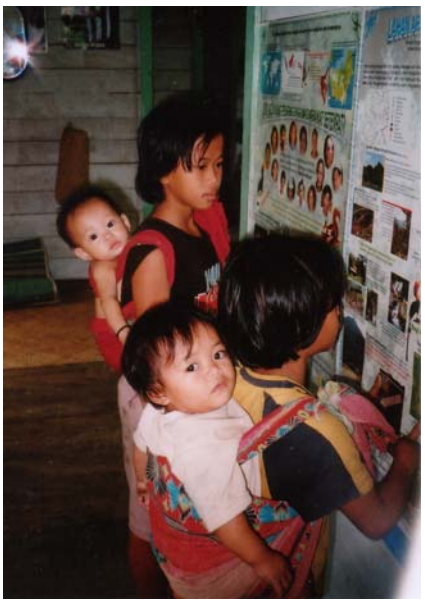

写真１　CIFOR が作成した地域の中での森林の役割についてのポスターを熱心に見る子ども

派遣先志望動機と，派遣前に設定した目標について

私は報告書の標題にあるテーマで博士課程の研究をすすめてきた。しかし，調査の過程で調査対象の元狩猟採集民の人々が抱える問題に気づいた。かれらは森林とその利用について豊かな知識をもっているが，伝統的な価値観や行動様式は現代的な定住生活とは馴染まない部分もあり，経済的に生活が安定していない。CIFOR はこのような社会･経済的問題について研究を行っており，派遣先として希望した。

森林の改変や社会の急激な変化がすすむなかで，森林資源を活かした住民の生活安定，森林と森林文化の保全は重要な課題となっている。また，調査地の人々自身もかれらの森林に関する知識や文化を誇りとし，それを次世代に伝えたいと考えている。調査地の社会経済的な状況を研究することで，その問題を明確にしてその解決の糸口をつかむ手がかりを得たいと考えた。生活の安定は，かれらが森林のそばに住み続け文化を伝えていくことを可能にすると考えている。

派遣期間中の活動について

派遣機関の受け入れ研究者パトリス・レヴァン氏の指導の下，調査の地域の人々の社会経済について研究を行った。(現地調査自体は，今回の派遣の直前に JIRCAS－独立行政法人国際農林水産業研究センターーのフェローシッププログラムにより行った。）現地調査では，以下のような項目について調査を行った。（１）調査地の村々の基本的な施設（学校，診療所，店，教会など)，（２）各世帯の構成員の情報（性別，年齢，学歴，出産経験，死亡者など)，（３）各世帯の所有物（家，ボートエンジン，テレビなど)，（４）各世帯の稲作の生産量，（５）収入源（林産物販売，日雇い労働，補助金など）と労働日数・収入の金額，（６）支出項目と各項目への支出額。

この結果，どのような経済的な背景のなかで，林産物の狩猟採集や加工が行われているのかが明らかになった。最近の大きな変化としては，石油価格の上昇や香木（高価格で取り引きされる林産物，写真２）の資源量の減少などがあった。このような経済的な変化が，文化にも影響を及ぼしていた。狩猟で獲れた動物の肉はこれまでは村落のなかで分配するものとされてきたが（写真３)，収入を確保するために他村へ肉を販売する世帯が現れていた。他にも各種のロタンの資源量に応じて，生産するロタン籠の種類などを変化させていた。また，農耕，狩猟採集，日雇い労働の間の労働分配，労働の選択の要因，収入の使い途や支出のありかたについての習慣などについてもデータを得ることができた。

派遣期間中には，調査結果の分析をはじめることができた。今後，分析をすすめ，調査結果のまとめを報告する。現地の人々自身や地方政府が，かれらの状況をよりよく把握するための資料となるようなものを考えている。また，レヴァン氏らと共著で，レヴァン氏が以前に行った社会経済の結果と比較しながら，変化しつつある元狩猟採集民の社会について論文を書く予定である。

写真２　以前に香木（ジンチョウゲ科の木のなかに樹脂がたまったもの，輸出されてお香として使われる）を採集したあと。数年待てば再び採集できるほどに樹脂がたまるが，たっぷり稼げるほどでない。

写真３　イノシシの頭と足を焼いているところ。このイノシシは集落のなかで分配・消費された。今後，販売にまわされる肉が増えていくのだろうか？

派遣先で印象に残った体験や経験

指導教員の小林繁男教授は CIFOR に所属していたことがあり，この派遣プロジェクトをつよく勧めてくださった。派遣前には CIFOR で何を得られるのか十分理解できていなかったが，応用問題に関わっている研究者と直接議論をすることは予想以上に得るものが大きかった。論文には表れない個人的な意見や体験についても知ることができ，それは，自分自身が研究問題についてどのように考えるのかどのようなスタンスで関わっていくのかを考える参考となった。また，発表されていないデータや商業出版にはでてこない文献などを得ることもできた。さらに，今までの研究とはすこし異なった課題に取り組むことで，自分の研究を新しい視点から捉えるためのよい機会となった。博士研究は民族植物学知識についてであるが，派遣によって深まった地域社会への理解をもとに，文化の経済的な基盤や，文化の保全の前提となる経済的な要因などについて研究を続けていきたい。

目標の達成度や反省点について

社会経済調査を行い，具体的なテクニックを習得するとともに，その重要性を認識できた。また，東カリマンタンの元狩猟採集民についての広域調査や村落開発プロジェクトなどに関わってきたレヴァン氏に指導を受けることで，地域の元狩猟採集民についてより広い知見を得ることができた。

具体的な研究成果については上に述べたとおりであるが，調査地の状況がみえてきた一方で，今回は詳細に調査しきれなかった部分もある。この不足点についての認識を，今後よりよい調査計画をたてるうえで活かしていきたい。

派遣機関の研究者と直接会って話をすることで得たものが大きかった一方，事前のコミュニケーションは十分ではなかったかもしれない。私自身も他の仕事に忙殺されていたし，受け入れ側もなかなか時間を割く余裕がとれなかったようだ。だからこそ，直接そこへ赴く意義があるともいえるが，事前準備が十分であるほど得るものが大きいであろう。